

九九二）年病気になるまで続け、病気で廃業して今日に及んでいます。

結婚は昭和二十三年でした。妻は元気で娘四人を産んでおり、孫は六人。皆元気で毎朝お天道様に感謝しています。

いろいろな事を思い出しますが部隊にいた頃に、戦友仲間と言い合った言葉に「弾丸は前から飛んでくるばかりではないぞ」と不穏なことがあります。筋の通らぬ我ままな先輩や古兵、上官への牽制だったと思います。

戦死の噂だった私が

無事復員

秋田県 庄司 信一

私は、大正十（一九二二）年五月五日、端午の節句に現在の大館市花岡町で生まれました。家族は鉾山で働く父、家事を守る母、それに二男三女で私が長男です。

ここでちょっと、私の生まれた花岡と言う所を紹介しますと、日本屈指の銅を生産する花岡鉾山の在る所で、秋田県の北端に位置し、青森県との境で大館盆地に在ります。一般に鉾山と言えは人里離れた山奥と思われ勝ちですが、花岡鉾山は、田畑の下部を採掘しております。

また、十和田湖、八幡平の秋田県側からの玄関口でもあります。花岡鉾山は明治十八（一八八五）年に地元の四人の方が発見し、鉾石の種類は銅、亜鉛、鉛、石膏、硫化鉄鉾（肥料の硫酸アンモニ

アの原料)、それに精錬課程で金、銀、硫酸その他半導体原料等で、従業員は花岡鉱山三千六百人、全社で九千人職種は採掘関係から医師から小使いまで、無いのが飛行機の操縦士ぐらいと言われる程、それぞれの職場で多くの人が働いています。

このように恵まれた土地で育ち、高等小学校卒業と同時に花岡鉱山に入社しました。当時の従業員の階級は、鉱員、小頭(鉱員から昇格)、職長(小頭から昇格)、工手(現在の工業高校卒)、助手(現在の普通高校卒)、技師(大卒)、主任係長課長となっておりまして、賃金、その他上下の差別甚だしいので、よし、これから学校へ入って勉強しようと思ひ、父も同意してくれて三年間務めた鉱山を退職、上京して電機学校に入學しました。

勉強に努力しておりましたが、二年のとき、徴兵検査適齢になり、身長、体重共に合格するような体格でないので、せめて第二種位だろうと思ひ、肩をパンと叩かれ「甲種合格」と言われた時はガツクリと頭が下がりました。

これに気付いた検査官は「庄司、貴様は軍隊に行きたくないのか、今までに貴様のような態度をとった者おらんぞ。甲種合格になると皆喜んでいくのに貴様はなんだ」と言われました。私は「いえ、そうではありません。このような体で軍人として勤まるだろうか」と心配で……」と言うと、検査官は「大丈夫だ、貴様より小さい者もおる、帰れ」と言われました。あの時の事が忘れられません。

学校に帰り、来年三月の卒業後の入隊を神に祈り勉學に励んでいました。ところが神への祈りも空しく、翌三月一日入隊通知が届いたのです。

これから軍隊生活について申し述べますが、六十年も前のことであり、最近、記憶喪失気味ですので、家族並びに職場の上司さらに友人のお力を拝借して、思い出した事のみです。ご了承下さい。

昭和十七年三月一日、現役兵として第六航空教育隊に入隊（確かでないが青森県八戸付近）、古年兵から笑顔で迎えられ、上げ膳、据え膳の毎日でしたが、一週間程過ぎた夜の点呼が終わって寝台にもぐりこもうとした途端、「初年兵、全員整列」と怒鳴る声だったので、一齐に寝台の前に立ちました。「間を詰めて並べ」と体重九〇キロ以上もある凄じ意地悪そうな一年上の一等兵が、何かかと思っていたら「君達の態度を一週間見ていたら皆弛んでいる。今から軍人精神を入れてやる。眼鏡をしている者は、外して全員歯を食いしげれ」と言った途端、平手で頬への往復ビンタ、終わると「今日は小指の爪程だぞ、よし、早く寝ろ」です。

私共の中隊の教育は一般の歩兵部隊の内容と同じ教育の他、航空機の付属電気系統の点検整備となっておりませんが、実際は滑走路の照明器具の点検整備、これ用の電池の点検整備、充電また爆撃機の投爆電気系統点検整備、トラック、重機等車両用電池の整備充電が主でした。

私的制裁は日増しに酷くなり、編上靴によるビンタ、柱に昇って蟬の真似を毎度三十分、敷布がちよつとでも汚れていると赤チョークで金魚が書かれる（チョークの赤色落としてに苦労しました）。編上靴の手入れが悪いと言って舐めさせられる等々筆舌になりがたしとは、この事でしょうか。

昭和十七年七月五日、四カ月の一期教育が終わって、千葉県柏の飛行第五戦隊に転属となり、ここではもっぱら帝都防衛の勤務に従事することとなりました。この隊には双発戦闘機のみで爆撃機の配備はなかったと記憶しております。

ここでは特別な教育も無く、専ら滑走路の照明器具及び誘導灯の点検整備と電池の点検整備充電でした。そして内務班では前のような私的制裁も無く助かりました。

六月末頃、人事係から呼び出しがあり「庄司、お前電気学校を出ているから、学校から卒業証明書を買って来い。特別公用扱いにするから貰って

来たら幹部候補生の受験ができるから」と言ってお
駅まで車で送って下さいました。

学校へ着いて事務係へお願いしたところ、学期
末のテストを受けていないので中退扱いになって
いるので残念だが駄目とのこと。せつかくの人事
係のご好意も無駄になってしまい、がっかりし人
事係も残念がっておられました。

昭和十八年六月二十三日、動員下令、南方に派
遣されることとなり、七月五日、宇品港出港、八
月九日、ジャワ島のジャカルタに上陸、前と同じ
飛行場の作業に従事していました。

九月三十日、再び派遣命令が下り、スラバヤ港
を出発、チモール島のラウテン（オーストラリア
の北）に上陸、同じ作業をしていました。

時々敵機の襲来があり、飛行場の照明器具等が
破壊されましたので、その修理等が大変でした。

せつかく修繕修理したかと思うと、またやられる
といった状況でした。

十二月十八日、マラリアに冒され、軽かったの
で入院することも無く、内務班で休養、同月二十
五日、ジャワへ帰隊命令が来てラウチンを出発し
て、昭和十九年一月二日、ジャワ島に帰島、上陸
したところ本隊は既に前進した後だったのでしば
らくここに留まることとなりました。

そうこうして二週間位経ってからマラリアが再
発し、野戦病院に入院、治療のために入院中、多
分三月頃だと記憶していますが、スラバヤ港を出
発した輸送船がバリ島沖で敵の潜水艦の魚雷にて
撃沈されたニュースが入りました。

本隊からの連絡があつて、四月十五日頃本隊へ
復帰のため出発することになり、退院してスラバ
ヤ港を出発し、敵の潜水艦の攻撃を避けるためボ
ルネオ島西岸の港、フィリピン南部の港アンポイ
ナ等に寄港しながら、十二月二十五日頃、八カ月
も輸送船の中の生活を（食糧等は寄港先で積み込
まれ不自由はなかった）してハルマヒラ島に上陸、
ようやく本部に合流、帰隊でき、ここで終戦まで

本来の作業を務めました。

以上のように点々と移動しましたが、凄まじい爆撃の被害は受けなかったのが何よりの幸いでした。また戦友の戦死、病死が一人もありませんでした。

終戦と同時に兵器のすべてを返納し、米軍の指揮下に入り、これからどうなるだろうと皆心配しましたが何の虐待もなく、また労働も無く平穏な毎日でした。

昭和二十一年六月四日、セラム島アサウデ港を出港、十五日、故国日本田辺港着、検閲を済ませ、同日復員完結、各人それぞれ元気で再会を誓い帰郷の途に着いたのです。

何の連絡もせず我が家へ入ろうとしたら母が「父さん父さん、信一の幽霊が来た」と叫び倒れてしまいましたので、私は「信一だ！ 信一だ！」と言うと、母が立ち上り抱き付いてワイワイ泣いて喜びました。

実は南方に征った兵隊は全員戦死した噂が立ったので、役場へ行って聞いたら「公報が入っていないから何とも言えないが、南方の兵隊のほとんどが玉砕したようだから」と言い、「しかし望みを捨てないで待っているように」と慰めてくれたのだそうです。

母は「諦めていたんだよ、近所の方々も信一さん戦死したそうだと噂していたんだよ。毎日神仏にお祈りをし、お前に影膳していて無事を祈っていたのが実った。ありがたや、ありがたや」と、夜更けを忘れ、そして朝まで喜び合いました。

しばらく休養して、前に勤めた花岡鉱山の労務課の人事係へ行つて採用をお願いしたところ運良く採用していただき、電気学校を出ているので卒業証明書を提出するよう話がありましたので、「実は軍隊に途中入隊したので中退となっている」事をお話したら、「そうか残念だが一般工員でもよいなら明日からでも電気係へ出勤するよう」と言われました。そして二、三日経ってから出

勤を始め、そのまま定年まで務めることとなりま
したが、兵隊に行ったばかりに志望を抱いて電気
学校へ行ったのが無くなったのが残念です。